

1 大塚地域の概要

大塚地域は、安来の中心部から伯太川の上流に6キロほど上がったところに広がる田園地帯で、地域内には小学校、認定こども園、郵便局、スーパー等がある。

平成29年1月末現在、人口960人、333世帯が暮らし、14自治会からなる地域であるが、少子高齢化が進み、高齢化率は40%となっている。

江戸末期の名力士「釈迦ヶ嶽雲右衛門」の生誕の地であり、宿場町、商人の町として栄えた街並みには、歴史上の遺産が多数あるが、最近では、2010年にテレビ放送された「ゲゲゲの女房」水木しげるさんの奥様、武良布枝さんの生家があることで有名となり、地域外から多くの方に来ていただいた。

2 事業の趣旨

大塚地域では平成21年に自主防災組織を立ち上げ、防災と災害に強い町づくりを目指し、年1回の防災訓練などを実施してきた。その中で「住民に広く浸透しているか」「このまま続いていくか」という不安・課題が浮かび上がってきた。今回多くの住民と共に事業に取り組み、住民同士が学び合うことで、地域を守る・つくる当事者意識を醸成し、住民の繋がりを深め、より安心・安全な地域づくりを目指す。

3 具体的な取組内容

専門家と一緒に地域内の危険箇所の現地視察を行い、それを踏まえた講演会・ワークショップを行った。また、

その結果を分かりやすくまとめ、地域内の全住民に周知する中で、地域内の住民の繋がりを深めた。

(1) 現地視察

各自治会の防災委員を含む自主防災組織の役員28名が参加し、専門家(特定非営利活動法人ぼうぼうネット山崎事務局長)と一緒に、川の決壊や土砂崩れ等が想定される危険箇所を見て回り、専門家から対応や防災面の具体的なアドバイスを受けた。

■防災用に配備した備品を実際に使用し、使用方法や問題点等を確認し、新たな気づきがあった。

■地区で想定していた避難場所が有効でないことが判明し、災害毎に応じた避難場所を真剣に話し合う必要があることが分かった。

■川の改修等も進んでいるため、大規模な水害は予想されないこと、震度6弱の地震がかなり高い確率で予想されるため、地震を想定した対応を考えること等のアドバイスがあった。

(2) 講演会・グループワーク

14自治会からそれぞれ5名以上(うち女性2名以上)、総勢98名の住民が参加し、現地視察を踏まえた講演と近隣地区毎のグループに分かれた図上訓練や討議を行った。

■講師は「行政の担当者は異動があり、何も分からない場合が多い、公助には限界がある」と繰り返し、『自助』と『共助』の重要性を力説された。

■参加者から「災害はいつどこで起こっても不思議ではない、危機感を持った」「大きな災害が起これば公的機関

は十分に機能しないから、自助・共助が大切」「日頃から考え、準備しておくことが必要」等の感想があった。



(3) 住民周知

現地視察・講演会等で講師から教示された内容と参加者の感想等を取りまとめたチラシを作成し、各自治会の防災委員を通し、全住民に周知した。

■各自治会で周知方法は異なるが、住民の繋がりを意識すること、要援護者の把握・対応については、より丁寧に行うことを依頼した。

■その成果や問題点等を把握し、今後の住民周知方法の改善を検討する。

4 評価と成果

(1) 自主防災組織の役員が各場面で活躍し、よりリーダー意識が高まり、また住民にもその存在が周知された。

(2) 地域全体から多くの参加があり、また日中地域におられる女性や高齢者の参加も多かったため、訓練の地域全体への広がり、有効性が高まった。

(3) 地域全体で起こり得る災害の危険性を認識・共有でき、地区を越えて助け合う気持ちを養うことができた。

(4) 経験・データの豊富な講師による講演等で、地域住民が危機感を持ち、公助に頼らない自助・共助の必要性や日頃からの備えの重要性を認識した。

(5) 普段話す機会の少ない方と真剣に話し合い、作業することにより、住民同志のコミュニケーションや繋がりの喜び、大切さを感じてもらった。

5 今後の課題と見通し

(1) 住民一人一人が自助・共助の考え、行動や備えについて認識を深め、持ち続けることが難しい。

⇒引き続き、多くの住民が参加する防災訓練等を実施し、その成果を周知・共有する仕組みを作る。

(2) 防災計画や資機材が、実際の場面で常に誰もが使えるものになっていない。

⇒「どういった訓練が必要であるか」住民の声を聞き、いざという時に有効な計画、機材にする。

(3) 地域の事業等に中学生、高校生、20歳代等の若年層の参加が少ないため、防災を含めた地域の将来の担い手が育たない。

⇒まず、中学生に地域の事業に参加してもらうための方法を、中学校と話し合う場を持つ。

防災意識も繋がりも、何もしなければ薄れていくので、今後も防災に係る取組を継続し、また、地域の事業へ住民が誘い合って参加したり、日頃の声掛けを大切にする中で、より地域の絆を深め、いざという時に自分を守り、助け合える「安心安全な地域」を目指していく。

(文責：館長 岡屋榮六)